

知佳子 令和3年9月度特別作品

平和公園の夏

知佳子

例年、多くの外国人や家族連れが訪れる夏の平和公園も、コロナ禍で来訪者が少なく、石畳の暑さをより厳しく感じます。そんな中、朝早くや日が落ちてからの時間には鳥や蝉、本々に心を癒されますし、真昼の本蔭の涼しさにはほっとします。

手入れの行き届いた慰霊の地では、行き交う人と自然に挨拶、会話を交わすこともあり、心穏やかな時を過ごすことができます。

早く平時に戻り、多くの方を迎えることができるとうにあればと思います。

手の届く枝に鳥来る梅雨晴間

白蓮の閑くを人に問うてをり

緋目高を追うて池の辺歩きたる

手を入れて水馬の水揺らしたる

梧桐を見てる顔に朝日さす

夾竹桃見上げて話してゐたり

杖の音極暑の石を進みけり

夏の月大きく残る夜明かな

手の中の油蝉鳴く朝かな

蝉止まるままの鞆を持ち上ぐる

《作品鑑賞》

亜矢

「平和公園の夏」は、朝の自然に焦点を当てた作品である。目を向けがちな原爆ドームや慰霊碑は出てこない。平和公園の静かな営みを再発見することができた。次回行ったときには、一層じっくりと物を見てみようと思った。

手の届く枝に鳥来る梅雨晴間

作者と鳥が対話しているかのよう。双方の喜んでいる様子が目に浮かぶ。

緋目高を追うて池の辺歩きたる

素早く泳ぐ目高を見失いたくないと、目をこらしながら歩いている。子供に限らず、そうしたくなるもの。

手を入れて水馬の水揺らしたる

池で水馬を見つけた作者は、水を揺らすとどうなるか気になり、思わず手を入れた。興味津津に目を輝かせていたことだろう。目高の句との行動の違いが印象的だった。

川の道(夏の太田川を辿る) 村上正人

新しい道路は車で走るのに都合がよいように、トンネルを掘り、橋梁を渡して出来る限り直線移動できるよう造りである。昔の道はそうではなかった。川に沿って造られた道は、狭くてゆつくりとしか進めない。一方で自然の恵みと怖さを目の当たりに感じることもあった。

この夏、自身が中高生るとき自転車であつた道を久しぶりに、車を停めながら辿ると、まだ残っている自然をなつかしく感じることができた。

白鷺の集まる中洲朝日差す

峰雲のもと溪流に魚を釣る

泳ぎ子の淵に飛込む岩場かな

涼しさや断崖のある川の道

滴りに寄れば吹きたる山の風

尾根よりの岨道辿り滝に着く

大岩に立ちて浴びたる滝飛沫

滝壺に湯き立ち泡の流れかな

夕立のあとの夕日や川の町

川を吹く風に飛びたる蜻蛉かな

《作品鑑賞》

亜矢

「川の道」は、作者の思い出の道を、愛情をもってありのままに詠んだ作品である。現代社会の人間の営みとは別の世界を切り取っている。

涼しさや断崖のある川の道

自然の厳しさと恵みの両方が伝わる句。十句の中で、この道を象徴する位置づけの句であると思われる。単なる写生に終わっていない。

大岩に立ちて浴びたる滝飛沫

飛沫を浴びながら、作者は何を思ったのだろうか。もしかすると、少年時代は一度も浴びたことがなかったのかもしれない。

川を吹く風に飛びたる蜻蛉かな

上五に惹かれた。作者の内面をうかがわせる。いつまでも、蜻蛉の飛ぶ川であり、道であってほしいと願うばかりである。